

さようなら原発全国 9.23 集会
スピーチ草稿・第 4 稿

みなさん、こんにちは。ピースボートの畠山澄子です。

私はこの夏、ピースボートの日本一周クルーズに乗っていました。船にはいま、ノーベル平和賞を受賞した日本被団協を紹介する「ノーベル平和賞洋上特別展」というものがあります。日本一周クルーズでは、船が各地の港に入るたびに、この展示をたくさんの方に見ていただきました。展示を案内しながら、被爆者のみなさんが歩んできた道、核軍縮の歴史、グローバルヒパクシャの声、そして今、世界で何が起きているのかを、一緒に考えました。

展示を案内しながら、私は、ときどき、こんな話をしました。「最近、大げさだと思われるかもしれないけれど、不安になることがあるんです。明日の朝、起きてスマホを見たら、『核兵器が使われました』というニュースが出ていたらどうしよう、と」

でも、今の世界ならありえますよね。そんな不安とともに毎日を生きなければならないことを、私、やっぱりフェアだと思えないんです。ましてや、実際に攻撃を受けている地域で、今日、自分の街に核兵器が使われるかもしれない。そう思いながら暮らしている人たちがいる。そんな世界を、当たり前にはしてはいけないと思います。

不安はもっとあります。この夏も、世界各地で豪雨や洪水、土砂崩れが起きました。つい先日までの台風による被害もそうですが、ネパールのニュースも本当に痛ましいです。

私はそうしたニュースを見ながら、2 年前にアラスカで見た氷河のことを思い出しました。目の前の氷河は本当にきれいでした。でも地元の人が、ずっと遠くを指さして、「20 年前は、あそこまで氷河だったんだよ」と教えてくれたその場所は、今の氷河の先端からとても離れた場所でした。

気候危機について話すとき、何度上がった、何トン排出した、何年までに何%減らす、という数字がたくさん出てきます。その一つひとつが大切です。でも、後退した氷河を目の前にしたときに、数字の向こう側で、私たちが生きている地球そのものが変わっている。その実感を、持ちました。

数十年後、私たちの生きる地球はどうなってしまうだろう。そんな恐怖に怯えながら日々を過ごすこともまた、私はフェアだと思いません。

そして、戦争や自然災害のニュースを見るたびに、必ず考えます。もし、その場所に原発があったらどうなるのだろう。

2011 年、地震と津波、そして福島第一原発事故が重なった福島では、ピーク時には 16 万 5 千人が避難を強いられました。避難指示区域の外から自主的に避難した人たちもいました。15 年以上たった今も、戻れない人がいます。もちろん避難や帰還だけではない、数字では捉えきれない被害は計り知れません。

2024 年の能登半島地震も思い出します。珠洲には、かつて原発を建設する計画がありました。候補地の一つだった高屋地区は大きな被害を受け、一時孤立状態になりました。道路が寸断されたあの地震で、もしそこに原発があり、原発事故まで重なっていたら、人々はどうやって避難したのだろうと思います。

原発は、ただ建物が壊れなければいい施設ではありません。冷却のための水がいる。電気がいる。安全を守る人が現場にたどり着かなければならない。そして事故のときには、人々が避難できなければなりません。気候危機が進み、自然災害が深刻になれば、そうした条件も同時に脅かされます。

そして今、私たちはもう一つの現実を目の前にしています。戦争です。

ウクライナでは、ザポリージャ原発が戦場の中に置かれています。原発は、止めればそれで安全になるわけではありません。止まっている間も、安全を保つためには水や電気が必要です。戦争になれば、そうした当たり前の管理そのものが難しくなります。

今年の中東でも、核施設が実際に攻撃を受けました。4 月には、イランのブシェール原発のすぐ近くに飛翔体が着弾したとの報告もありました。戦争が始まれば、原発や核施設だけを戦争の外に置いておくことはできない。その現実を、私たちは目の前で見ています。

戦争、原発、気候危機。この三つを並べてみると、共通するものがあると思います。持続可能ではない。そして、フェアではない。そこには必ず、不条理や不平等があります。

事故が起きなくても、原発は使用済み核燃料という、非常に長い時間管理しなければならないものを残します。今ここにいる私たちのために電気をつくり、その後始末を、まだ生まれていない世代に託す。それを本当に「持続可能」と呼べるのだろうか。気候危機への対応は、発電するときの CO2 だけではなく、その先に何を残すのかまで含めて考えなければならないと思います。

世界に目を向ければ、ウランを掘る場所にも、原発を建てる場所にも、核のごみを置こうとする場所にも、そこには暮らしている人がいます。家があり、文化があり、歴史があります。日本でも世界でも、そうした場所で声をあげ続けてきた人たちがいるけれど、それらの声はびっくりするほどにかき消されてきました。

大量の電気を使う場所と、そのための危険を引き受ける場所は、多くの場合、離れています。原発の立地には多額の交付金などが伴い、地域の暮らしや財政が原発と深く結びついていく。その中で賛成と反対の分断が生まれ、「嫌だ」と声をあげることで自体が難しくなっていくこともあります。

気候変動も同じです。ピースボートでは、小さな島国の若者たちと一緒に世界をまわる活動を続けてきました。その若者たちから、「このまま海面上昇が進めば、近い将来、自分たちのふるさととはなくなる」と聞いたときの衝撃を、私は忘れません。気候変動にほとんど責任のない人たちが、最初に、そして最も深刻な被害を受ける。これも、フェアではありません。

さらに今年、中東での戦争によってホルムズ海峡の通航が大きく制限され、世界の石油供給も大きく揺れました。一つの戦争で、世界中の暮らしや経済がこれほど簡単に揺さぶられる。私たちのエネルギーの仕組みそのものが、それほど脆いということです。これを持続可能と呼ぶのでしょうか。

そもそも戦争は、それ自体が大きな環境破壊です。空気を汚し、水を汚し、土を傷つけ、生態系を壊す。今年の中東でも、国連環境計画は、石油施設への攻撃による火災や煙が人の健康と環境に長期的な影響を及ぼすおそれを指摘しています。ウクライナでも、戦争による環境被害は戦闘が終わったあとまで残ると警告されています。

気候危機。エネルギー。原発。核兵器。戦争。これらを別々の問題として考えることは、もうできません。全部、つながっています。

だからこそ、一つの問題を解決するために、別の場所に危険を押しつけていないか。今の便利さのために、未来に負担を送っていないか。安全保障の名の下に、人の安全や地球の安全を壊していないか。問題が交わっているところを見ながら、社会をつくっていく必要があると思います。

ではどうしていくのか。

国と国との大きな政治が、なかなか答えを出せない今だからこそ、エネルギーの未来を、自分たちの手に取り戻すことが大切だと考えます。

世界には、そんなことを実際にやってきた人たちもいます。ドイツの小さな町、シェーナウでは、チェルノブイリ原発事故をきっかけに住民が動き、二度の住民投票などを経て、1997年に地域の電力網を市民の手に取り戻しました。その後、市民主体で再生可能エネルギーを広げてきました。

ドイツだけの話ではありません。日本にも、市民共同発電や地域の太陽光発電、営農型太陽光など、自分たちの地域で使うエネルギーを、自分たちの手でつくっていかうとする取り組みが各地にあります。

何か巨大な技術が突然、世界を救うという話ではありません。最初にあるのは、「このままでいいのだろうか」という、ごく普通の人たちの疑問です。でも、その疑問を行動に移していくことが、地域が危機に耐え、立て直していく力を生み、いつか大きな社会の変化につながっていくのだと私は信じます。

人間は、これまでたくさんの技術を生み出してきました。その技術によって救われた命があり、自由になった人がいて、光が当たるようになった人権があります。技術は、人間のすばらしい力です。でも、その技術が人の命を傷つけ、地球を傷つけ、まだ生まれていない人たちにまで大きなリスクを残すことがわかったのであれば、立ち止まり、舵をとり直せるのも、人間の力ではないでしょうか。

冒頭でお話した、日本被団協のノーベル平和賞の展示。その最後に、二つのパネルがあります。一つめは、From Hibakusha to You.「被爆者から、あなたへ」。

そこには、被爆者のみなさんが残してきたたくさんの言葉があります。核兵器が使われたら何が起きるのか。その後、被爆者として人生を生きるということが、どういうことだったのか。

そして、その向かい、展示の一番最後のパネルには、What About the Future? 「では、未来はどうしますか」とあります。

私は、**この問いがとても大事だと思っています**。

そこには答えは書いてありません。未来をどうするのかは、それを見た私たちに委ねられているということです。

私たちは、この地球に生きながら、もうたくさんの声を受け取っています。広島と長崎から。福島から。チェルノブイリから。核実験によって土地と暮らしを奪われた太平洋の島々から。海面上昇によって、ふるさとを失うかもしれない島々から。戦争の中で暮らす人たちから。そして、変わり続ける地球そのものから。

18年前、私が初めてピースボートで地球一周をしたとき、北米の先住民の人たちの、目の前の自分たちだけではなく、七世代先のことまで考えて物事を決める、という考え方を学びました。指導者には今だけではなくまだ生まれていない世代に対しても責任がある、ということなのだと理解しました。

未来を見ることはできません。でも、未来を想像することはできます。世界のどこかで同じように悩み、考え、声をあげている人たちと、手を取り合うこともできます。

核兵器が使われる朝を、待たなくていい。原発事故が起きる日を、待たなくていい。気候危機がもっと取り返しのつかないところまで進むのを、待たなくていい。私は、そんな未来のほうがいい。

だから、起きてから後悔するのではなく、起きる前に未来を変えていく。

私は、戦争のない未来を。核兵器のない未来を。原発に依存しない未来を。そして、誰かに危険や犠牲を押しつけるのではなく、この地球上で、次の世代も安心して暮らしていける未来を、つくっていきたいと思います。

What About the Future? 未来をどうしていくのか。

この問いを、一緒に考えましょう。そしてその答えを、世界の人たちと、そしてみなさんと一緒に、一つずつ、つくっていききたいと思います。

ありがとうございました。